形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について

山本俊英

日本語の形容詞は活用の種類によって分つと、ク活用・シク活用の二種類になる。そして形容詞は必ず両活用の何れかに属するものでこれ以外に他の活用はあり得ない。

ところで、ク活用とシク活用を形態の上から見ると、シク活用は活用に際して、ク活用にない「シ」の音が入る。この「シ」と言う音節は何故入り、何を意味するのであろうか。

ここで考えられることは、ク・シク両活用の間には意味上、何か大きな、そして根本的な相違があるのではないか、ということである。そしてその相違と、シク活用に挿入されている「シ」とは密接不離の関係にあるのではなかろうか。

私はここで「シ」という音節がどのような起源のものであったか、ということは言えない。しかし音節「シ」が古代において如何なる性質のものであったか、ということについて上代の文献に存する形容詞のク活・シク活を対比して考察した結果、次のことが言えると思う。

ク活用に属する語と、シク活用に属する語との間には、それらが表わす概念の上で確かに大きな相違がある。即ちク活（ク活用に属する語の意。以下シク活も同じ）は「重し」「白し」「高し」「長し」「深し」等の状態的な属性概念を表わす語が大部分であるに反しシク活は「うれし」「恨めし」「悲し」「楽し」「恋ほし」等の心的な、情意的な面を表わす語が大部分である。相互の例外は無いではないが、極めて僅少である。奈良時代に於ける例外の率は約二十パーセントである。この例外は時代がたつとともに増加するが、それは形容詞の意味が次第に転用されて、本来あった活用形と意味との密接な関係が次第に薄くなって行った結果であろうと思われる。

以下実例を列挙して吟味してゆこう。なお用例は、語幹のみのものや、カリ活用はとらず、字音仮名で書かれてあるものは総べてこれをとり、止むを得ない場合は字訓仮名で書かれてあるもの及び振仮名のみのものをもとった。カ行延音も活用語の連体形に aku の加わったものと考えられる故、とることにした。はじめ日本書紀からとり、それ以外の例は古事記から補い、次に万葉集・続日本紀宣命から補った。

奈良時代のク活の例

伊羅那鶏区(痛)・宇須家(薄)・于麻時(可美)・于黎多棄(慨)・於母之楼枳(面白)・於朋者(大)・於朋鶏句(多)・伽之古倶(畏)・柯陁倶(堅)・須賀志(清)・旨屢倶(著)・多輔妬句(貴)・那我倶(長)・儞倶(無)・破挪鶏(早)・摩曾祁(全)・椰主区(安)・曳岐

（良）・豫枳（良）・倭柯枳（若）〔以上日本書紀〕阿遠岐（青）・久路岐（黒）・斯路岐（白）・波夜祁（速）〔以上古事紀〕安可思（明）・安伎良気伎（明）・浅・熱・暖・歴（普）・安良伎（荒）・伊多之（痛）・伊知之路久（著）・煙寸（欝悒）・宇之（憂）・於芸呂奈伎（広大）・遅・鈍・於保束無・重・可蘇気伎（幽）・可多思（難）・幸（辛）・吉用伎（清）・闇・聰・左牟之（寒）・佐夜気久（清）・之気思（繁）・之頭気師（静）・須可奈久（悲）・須久奈久（少）・須牟也気久（速）・狭・多可伎（高）・多家吉（猛）・多比良気久（平）・懈・手弱寸・知加久（近）・速（疾・利）・等保伎（遠）・登保之呂思（雄大）・二八十一（憎）・奴流久・広伎（広）・布可久（深）・太・布流之（古）・麻禰久多）・美自可伎（短）・米具斯（愚）・木丘（茂）・微（脆）・由多気伎（寛）〔以上万葉集〕厚支・小・宇治方夜伎（逸速）・賀多自気奈志・軽久・穢・多豆何奈岐（便無）・多夜須久・拙久・直支・劣〔以上続日本紀宣命〕

伊羅那辞区は「刺・苛」を意味する伊羅に、「甚しい」を意味する那志の加ったものと考えられる故（一応「痛」の漢字を当てたが）本来の心情表現の語ではない。于黎多棄は「心」を意味する于羅に、「痛し」が加わったものである。於母思路伎は於母（面）と思路伎（白）との合したものである。多輔妬句は語源的に「手太く」であるとする説があるが、もしそれが正しいならば例外とはならない。煙寸は「欝悒」の字を当てておいたが、これは心的な、と言うより、原義はやはり霧や霞が立籠めて晴れないさまを言ったものと思われる。於藝呂奈伎は「広大・雄大」を意味する。聡は接頭語「サ」が「鋭し」に付いたものである。須可奈久の須可は眇（スカメ）（この語は後世スガメとなったが、類聚名義抄にはスカメと清音になっている）のスカと恐らく同源の語であろうからこの語はスカとナシの合成語と考えられる。ナシは「甚しい」の意味の古語である。

よって例外は、于麻時・于黎多棄・伽之古倶・伊多之・宇之・左牟之・懈・二八十一・米具斯・賀多自気奈志の十語で、用例総数八十六例中、約十二パーセントを占めているのである。

奈良時代のシク活の例

婀梅羅斯枳（惜）・異枳廼倍呂之（憤）・于都倶之（愛）・于漏破試（愛）・伽那志鶏区（愛）・倶斯（奇）・倶波祢（美）・倶流之（苦）・玖流保之（狂）・姫哀之枳（恋）・佐餓始枳（嶮）・婆祢稽矩（愛）・保指（欲）・瀰都瀰都志・予呂辞枳（宜）・鳴思稽矩（惜）〔以上日本書紀〕…倶波斯（細）・久夜斯岐（悔）・佐加志（賢）・志祁志岐（湿）・多怒斯久（楽）・登々富々斯（遠々）・登母志岐（美）・那美多具麻志（涙）由々斯伎（忌々）・予良斯（吉）〔以上古事記〕安之伎（悪）・安夜之（怪）・勤・伊都久志吉（厳）・言借（訝）・伊也之伎（賤）・宇都之（現）・宇良売斯企（恨）・宇礼之伎（嬉）・於保保志久（欝）・於母保之吉（思）・家思吉（異）・己凝敷（嶮）・左夫思（寂）・須受之岐（涼）・多頭多頭思・奈都可之（懐）・心吉（苦）・波豆可之（恥）・比左之伎（久）・貧・無奈之久（空）・米豆良之（愛）・夜佐之（恥）・和備思（侘）・恵麻波之伎（笑）・男志（愛）〔以上万葉集〕重支・労支・宇武何志伎・於母自岐・紆岐・久須之久（奇）・許貴太斯伎・正支・平善・与呂許保志（慶）〔以上続日本紀宣命〕

婀梅羅斯枳は「新しい」の意に用いられた例もあるが、「惜しい」という意の方が原義である。于都具之・于漏破試・伽那志鶏区の三語には何れも「愛」の字を当てておいたが「可愛いい」意

を表わす情意的な語である。婆縦稽矩にも「愛」の字を当てたが、前の三語と幾らかニュアンスが異り、「憐れむ」意に近いものであろう。灑都灑都志は意義不明であるから考察から除外する。予呂辞枳であるが、予良斯という語の存在によって分るように「寄らし」から起ったものであろうという。丁度、「行かし」が「床かし」と解されるのと似ている（大野晋先生説）。それによれば情意的な意味になる。倶波縦は一般に「麗」の字が当てられており、用いられている個所から判断してこの字が適当と思われるが、「麗しい」という意は「可愛いい」という意を含み得るものである。…具波斯として挙げたのは、迦具波斯・波那具波辞等である。これらは体言に具波斯を付けたもので、源氏物語の時代に出てくる「……がまし」と同じつくり方であるが、この具波斯は倶波斯（美）の語頭が濁音したものであるから情意的な内容とみられる。志祁志岐は湿った感じがすると言う意とすれば例外ではない。安之伎は「いやだ」と言う意を原義とするのではあるまいか。伊也之伎は安夜之と起源を同じくするようである。於保保思久は煙寸と同じく爵として晴れぬさまを言ったものであろうが、この語は初めから情意的な語だったのではないだろうか。須受之岐に「涼」の字を当てたが、この語は今日でも時々用いる人がいるように、胸のもやもやした気分が消え失せる時に用いられる、これが原義であろう。多頭多頭思も情意的な表現の語として解せる。労支は「可愛いい」意を原義とする。宇武何志支は「嬉しい」の意である。

よって例外は、佐餓始枳・佐加志・志祁志岐・登々富々斯・安夜之・勤・伊也之伎・宇都之・己凝敷・比左之伎・貧・無奈之久重支・於母自岐・許貴太斯伎・正支の十六語で全例六十二例中、二十六パーセントである。

以上奈良時代の形容詞について吟味して来たが、次に平安時代の例（古今集・源氏物語）と比較してみよう。

古今集のク活の例

あかし（赤）・あかし（明）・あさし（浅）・あぢきなし・あやなし・いたし（甚）・うし（憂）・うしろめたし・うすし（薄）・うとし（疎）・おぼつかなし（覚束無）・おもしろし（面白）・かたし（難）・からし（辛）・きよし（清）・くらし（暗）・くろし（黒）・こころぼそし（心細）・こし（濃）・さむし（寒）・しげし（繁）・しるし（著）・しろし（白）・すくなし（少）・たかし（高）・たけし（猛）・たゆし（懈）・ちかし（近）・つらし（辛）・つれなし・とし（疾）・とをし（遠）・ながし（長）・なし（無）・ぬるし・ねたし（妬）・のどけし・はかなし・はやし（早）・はるけし（遙）・ふかし（深）・ふるし（古）・まだし（未）・みじかし（短）・めでたし・やすし・よし（良）・をそし（遅）

古今集のシク活の例

あし（悪）・あたらし（新）・あやし（怪）・いやし（賤）・うらめし（恨）・うれし（嬉）・うれはし（憂）・かしがまし・かなし（悲）・くるし（苦）・こひし（恋）・さかし・さびし（淋）・すずし（涼）・ただし（正）・なつかし（懐）・ひさし（久）・ほし（欲）・まさし（正）・むなし（空）・めづらし（愛）・やさし（恥）・をし（惜）・わびし（侘）

ク活用において、例外はあぢきなし、いたし、うし、うしろめたし、おぼつかなし、こころぼそし、さむし、たゆし、つらし、つれなし、ねたし、めでたしの十二語で用例総数四十九例中、約二十四パーセントを占める。

シク活用において、例外は、さかし、ただしき、ひさし、まさし、むなしの五語で、用例総数二十四例中、二十一パーセントを占める。

源氏物語には四百七十八語の形容詞があるがその内別は次の通りである。源氏物語では一語が状態的意味も情意的意味も兼ねるものがあるが一応区別して示すことにする。

ク活用。用例総数二百三十四例、うち例外八十六で三十七パーセント。

シク活用。用例総数二百四十三例、うち例外百十四例で四十七パーセント。

源氏物語に於て形容詞はその発達史上全盛を極めたと言えるであろう。源氏物語自体が既に情意的な物語であるから当然のことである。そこで想像されるのであるが、特にシク活用は例の総数から言っても、又新たにつくられた語の数から言っても遙かにク活用を凌ぐであろうと思われるが事実はそうではない。総数は両活殆んど同数である。新たにつくられた語はク活・シク活ともに接頭語、或は体言に前代から存した形容詞を付してつくるもので、これが全体の約半数を占める。特にシク活については、ク活の語幹、或は体言を二つ重ねてつくるもの、或は体言に特定の接尾語（シク活用にはたらく）を付してシク活用となすもの等がある。

ここでこれら複合形容詞について、もっと吟味してみる必要があろう。

先に挙げた古今集のク活の例において、あぢきなし、あやなし、おぼつかなし、つれなし、はかなし、これら何れも「なし」のついた合成形容詞であり、うしろめたし、めでたし、は「いたし」の合成せるもの、こころぼそし、は「ほそし」より発展したものと考えられる。これらはク活でありながら情意的な意味を表わして例外となるが、本来の情意表現の語ではなく、複合によって後世につくり出されたものである。故にその事情を考慮に入れると、古今集のク活の例外は七例で、用例総数四十一例中、十五パーセントとなる。

又源氏物語の例において、ナシの合成形容詞は四十例（うち例外としたもの十八例を含む）を数える。イタシの合成形容詞は十例（うち例外としたもの八例を含む）である。又何らかの意味で合成形容詞となっているものは百二十七例で全体の五十四パーセントを占めている。この数字は、ナシ・イタシのつくる合成形容詞をも含めてのものである。そして、ナシ・イタシは形容詞の造語上極めて一般性があり、且つ造語力にも富んでいるものである。しかしそれだけに又、状態の形容詞（即ちク活）と、情意の形容詞（即ちシク活）との間の混同の大きな原因ともなっているのである。

古今集、源氏物語の例において、個々の語については特に吟味しなかった。この時代には、奈良時代に存した「形容詞シク活用に属する語は情意表現をなしたものである」という意識は次第に薄れてしまったのであって、そこではじめて源氏物語のような複雑な形容詞の合成も行われ得たのであろう。そこで「……のよう

だ」「……のように思われる」といった程度のものでも形容詞として成立するのであり、単に「シ」という音をつければどのような語でも形容詞に成り得た観がある。従って、当然ク活用に属すべき語がシク活にあったり、又逆にシク活用に属すべき語がク活用にうつる、ということも又当然あり得るわけで、この時代の用例を一つ一つ吟味することはあまり意味のないことであろう。

源氏物語の時代の形容詞はこのようにしてつくられていったため、奈良時代に存した「形容詞シク活用は情意表現をなしたものである」という原則は全く破られ、以後現代に至る間の形容詞には、特定の語を除き、形容詞の衰退とともに、この原則は殆んど見出し難くなったのである。

このように奈良時代・平安時代の形容詞を並べてみると、奈良時代の例に約二割の例外は出るが、それは古今集においては更に増大し、平安中期の源氏物語においてこのように混乱してしまったということになる。このように混同する傾向は時代が下る程甚しくなる故、逆に奈良時代以前の古代日本語の形容詞は、より純粋な姿においてこの原則が守られていたのではないかと思うのである。

しかし、やはり一つの疑問が残らないでもない。それは「伊多之（イタシ）」「宇之（ウシ）」「宇麻時（ウマシ）」「宇礼多伎（ウレタキ）」「二八十一（ニクク）」「米具斯（メグシ）」等の語で、これらはク活用に属すとは言え、あまりにシク活的意味を多くもっていることである。然し、数の上から言って極めて僅かであるという点からすれば類推によって生じた語であると言えるかも知れない。

最後に、ク活に入らない「シ」がシク活に特に入っているということと、今私が述べて来たことから推して、シク活に共通に入るこの「シ」という音節は、形態の上からしてク活よりシク活を区別する為の単なる目安となっているのではなく、この「シ」自体がシク活において、シク活をシク活たらしめて、その性格を決定しているものであると思うのである。即ち、シク活においてこの「シ」という音節がシク活の情意的な要素を表わしていたのである、と考える。

——学習院大学国文学科二年学生——